

## 第51回新生ふくしま復興推進本部会議 議事録概要

■ 日時：平成28年4月20日（水）16：00～16：35

■ 場所：第一特別委員会室

（鈴木副知事）

ただ今から、新生ふくしま復興推進本部会議を開催します。

まずは、議題に入る前に今回の平成28年熊本地震への対応について、現在の状況を危機管理部長から報告をお願いします。

（危機管理部長）

4月15日に発災の翌日でございますが、職員3名を派遣して情報収集に当たっています。19日は、第2班を派遣をいたしまして、土木企画課の職員も現地に入っております。本日は熊本県からの要請に基づきまして、嘉島町の方に職員5名を派遣をいたしまして、今回は、一つには避難所の運営、物資の調整、それから、応急危険度判定のための職員5名を派遣しております。合計3班で今のところ11名を派遣したところでございます。それから、16日ですが、医科大学からDMAT等を土曜日に派遣したところです。それから、21日明日ですが、県立矢吹病院から、災害派遣精神医療チームDPATを避難地域に派遣する予定です。それから、その下ですが、全国知事会から現在、県に要請が来ておりまして、救護班5名の要請があり、医大では、派遣する前提で調整をいただいているということです。こうした国や全国知事会の支援スキームと並行いたしまして、2班で昨日派遣しました、災害対策課と土木企画課の職員を本日嘉島町に派遣をし、訪問をさせて、人的・物的な支援としてどのようなものが必要なのか、そのニーズを直接役場の方とお話を聞いて調整をするということにしておりまして、当面、熊本県から割り振られました嘉島町の支援にも注力をしていきたいと考えてございます。

（鈴木副知事）

それでは、引続き関係機関と連携して、支援について対応をお願いしたいと思います。

それでは議題に入ります。1つ目、「風評・風化対策の強化」について、風評・風化対策監をお願いします。

（風評・風化対策監）

資料1-1を御覧ください。風評・風化対策につきましては、29年度までに震災前の水準まで回復することを目指し、3の実績のとおり、各部局が連携し取り組んでまいりました。プロジェクトチームにおきまして、県産品、観光・教育旅行の回復、情報発信など、7つの分野ごとに課題を整理し、一番右側の取組強化ポイントとして、「1 県産品の取引拡大を進めること」、「2 食の安全などの正確な情

報発信」、「6 来て、見て、理解を深め発信してもらうこと」、「7 ふくしまの今を直接伝えること」など、13項目として整理いたしました。

資料1-2をお願いします。これらを踏まえ、主な取組方針として40項目を示しました。県産品では、「2 首都圏量販店で単発ではなく、一定期間の『ふくしまフェア』の開催」、「5 消費者・学生対象のモニターツアーやセミナーの開催」、右側の観光誘客では、「1 アフターDCの展開」、「5 海外からの誘客を目指した台湾、オーストラリアなどへのプロモーション」、国内外への情報発信では、「1 首都圏学生のスタディツアー」、「3 食育推進全国大会など、全国規模の行事」、「4 ふくしまの今を表現する『歌』による発信」、さらには、全国の自治体、企業、団体とのつながりを広げること、市町村と連携した観光、情報発信の強化、国との関係においては、G7閣僚会合など国際会議の活用、輸入規制撤廃に向けた働きかけなど、下段のロードマップのとおり、各部局連携の下、取り組んでまいります。

資料1-3は、風評・風化対策の関連指標であります。説明は、以上です。

(鈴木副知事)

関連して、観光交流局長。

(観光交流局長)

平成28年度の風評・風化対策としては、大きく3つを考えています。1つ目は、観光誘客の促進であります。本県に来て、理解を深めて、それらを発信してもらうことが大切であるということから、4月にスタートいたしました、アフターデスティネーションキャンペーン、これは、3年間のデスティネーションキャンペーンの集大成として、本番並みの規模で実施しておりますけれども、こちらに一人でも、多くの方に御来県してもらえよう、地域の方々と一緒になって、しっかりと取り組んでいるところであります。

それと合わせまして、海外からの誘客いわゆるインバウンドの増加を目指した取組を積極的に進めてまいります。

2つ目ですけれども、教育旅行の回復です。県外の子どもたちが本県を訪れて、本県の理解を深めてもらうとともに、保護者あるいは、地元の方々への正確な情報の発信といった波及効果も期待できますので、福島ならではのコンテンツの磨き上げや、昨年度創設しましたバス代助成制度を活用しながらその回復に力を入れてまいります。

3つ目です。県産品の販路回復・開拓ですが、これは、農林水産部と連携をいたしまして、福島県産品の安全性や魅力などの情報を国内外に向けて、効果的に発信することにしておりまして、特に、観光交流局では、海外の消費者に直接かつ継続的に発信する取組を始めることとしてございます。

(鈴木副知事)

次に、農林水産部。

(農林水産部技監)

農林水産物につきましては、モニタリング検査などをしっかり実施し、食の安全性に関する情報の発信と販売対策などを講じてまいります。

農林水産物のモニタリング検査については、資料1―3のとおり、昨年度、栽培している農産物や畜産物に基準値を超えるものは出ておりませんが、根強い風評のため全国平均との価格差が解消できていない状況にあります。

このため、引き続き「ふくしまプライド。」をキャッチフレーズとしたテレビCMを放送するとともに、大学生を対象としたスタディツアーを開催し、「来て、見て、味わって、感じて、理解を深めて」いただき、参加者にSNS等で情報発信していただくなど、取組を強化してまいります。

また、生産者団体と連携し、首都圏での商談会に加え、今年から新たに量販店等で販売促進フェアを実施し、生産者等が直接消費者に働きかける機会を設けるなど、産地のこだわりや生産者の思いを伝え、より多くの共感を得て、販路回復に結びつけてまいります。

(鈴木副知事)

他にありますか。それでは、知事からお願いします。

(知事)

県産品の販路開拓、観光、教育旅行の回復など、これまで行ってきた取組をより良くするためにどうするか、これについて積極的に進めていくことが大切です。

情報発信についても、私自身を含め、各部署長も様々な機会を捉え、直接伝えていくこと、より伝わる、共感が得られるよう、ホームページやメディアなど、様々な手段で発信していくことを意識をして、常に工夫しながら、新しい取組への挑戦を続けてください。

市町村や国と連携し、そして、応援いただいている多くの方々との共感の輪を広げながら、全庁を挙げて、風評・風化対策に取り組んでまいりましょう。

(鈴木副知事)

それでは、これについては、原案のとおり決定することといたします。

次に、議題2の「ロボットテストフィールド及び国際産学官共同利用施設」について、商工労働部長。

(商工労働部長)

資料2―1を御覧ください。

ロボットテストフィールド及び国際産学官共同利用施設につきましては、災害対応やインフラ点検で活用が期待されるロボットの実証の場、また、国内外の研究機関による先端研究の場などとして期待されるものであり、本県浜通り地域へのロボ

ット産業の集積及び雇用の創出を目指して整備するものです。

Ⅱの経緯でございますが、今年1月に経済産業省との間に整備・運営に向けた協定を締結し、3月には有識者による検討委員会から中間整理として、整備の考え方が示されたところです。資料の後ろの方に、参考資料というのがございますけれども、ロボットテストフィールドの概要、参考資料1-1それから裏面が、参考資料1-2ということで、国際産学官共同利用施設の概要でございます。拠点の選定につきましては、Ⅲに記載のとおり、今回5市町村から、設置の要望がございまして、現地調査やヒアリング結果を踏まえて、各候補の検討を行いました。

資料2-2を御覧ください。1ページ目は5市町村から要望のあった候補地の概要をまとめた資料でございます。2ページから説明いたします。まず、2ページでございますが、南相馬市からは、ロボットテストフィールドの候補地として、原町区の萱浜地区の復興工業団地予定地、国際産学官共同利用施設の候補地として、同地区のほか、テクノアカデミー浜近接地及び下太田地区の提案がありました。面積はそれぞれ55.3ヘクタール、0.45ヘクタール、0.9ヘクタールです。

次に3ページでございますが、浪江町からは、両施設の候補地として、棚塩地区の提案がございまして、面積は約54ヘクタールです。

次に4ページ、5ページでございますが、川内村からは、両施設の候補地として、下川内地区の提案があり、面積は2.7ヘクタールです。

檜葉町でございますけれども、ロボットテストフィールドの候補地として、山田岡地区の土取場跡地、国際産学官共同利用施設の候補地として同地区の檜葉南工業団地の提案がございまして、面積はそれぞれ5.2ヘクタールと1.6ヘクタールです。

最後になりますが、広野町からは、国際産学官共同利用施設の提案のみでございますけれども、これは、広野駅前の下浅見川地区、面積は0.9ヘクタールです。そのような状況の中で資料2-3でございますが、これは、候補地選定の視点でございます。内容は検討委員会の中間整理に基づくものでございまして、今回、この視点に従って、ロボットテストフィールドについては6つ、国際産学官共同利用施設については4つの観点から検討を行っております。それで、資料2-3の一番下でございますが、ロボットテストフィールドについては、10キロメートル離れた場所に、滑走路の1つを整備することが適切である、というような中間整理がなされております。

資料2-4でございます。まず、ロボットテストフィールドの候補地の選定ですが、約50ヘクタール以上の面積が必要ということで、それをクリアする南相馬市と浪江町の二つに絞られます。両者を総合的に評価しますと、「南相馬市原町区萱浜地区」が最適地であると考えられます。

なお、中間整理において、10キロメートル程度離れた場所にフィールドの附帯施設として離着陸試験用の滑走路を別途整備することが適切との意見が出されており、浪江町からは、この候補地についても提案があったところです。附帯施設の滑走路については、浪江町を候補地に決定したいと考えます。説明は以上です。

(鈴木副知事)

ただ今の説明について、御意見を伺いたいと思います。土木部長。

(土木部長)

浜通り地域の復興の原動力となるイノベーション・コースト構想の早期実現には、まずは用地の造成が課題となります。南相馬市原町区萱浜地区の候補地は、既に市が整備を進めております。また、周辺的生活インフラなども整っており、ロボットテストフィールドの候補地としてふさわしいと考えます。

トンネルや橋梁などを管理する土木部としましては、フィールドでの実証試験により、インフラ点検などにおいて、ロボットの活用が促進されることを期待します。

(鈴木副知事)

避難地域復興局長。

(避難地域復興局長)

イノベーション・コースト構想の拠点は、復興のシンボルでありまして、住民や事業者の地元産業復興に対する期待を高めて、また、実際の産業集積にもつながっていくものであると考えます。

この点から言えば、南相馬市に全施設を設置するのではなく、附帯施設である滑走路を浪江町に別途設置するという案でありましたけれども、これによりまして、拠点の効果が地域全体に広がって、地域の復興、住民の帰還の足がかりとなるのではないかと期待します。

(鈴木副知事)

他に意見はありませんか。

なければ、ロボットテストフィールドを「南相馬市原町区萱浜地区」に決定するとともに、附帯施設としての離着陸試験用滑走路を別途「浪江町棚塩地区」に設置することについて異議はありませんか。

それでは、そのように決定させていただきたいと思います。

商工労働部長、引続きお願いします。

(商工労働部長)

それでは、資料の2-5を御覧ください。国際産学官共同利用施設の候補地選定でございます。共同利用施設については、ロボットの試作や基礎性能試験、製品改良などを行う施設でございまして、ロボットの研究開発・実証のためには、今ほど決定させていただいたロボットテストフィールドとの密接な連携が求められております。

これを踏まえますと、フィールドと同一敷地内への整備が可能であること、早期

造成、地元のロボット産業界の取組などから、「南相馬市原町区萱浜地区の復興工業団地予定地」が最適地であると考えられます。説明は以上です。

(鈴木副知事)

ただ今の説明について、御意見を求めたいと思います。企画調整部長。

(企画調整部長)

共同利用施設の設置に当たっては、テストフィールドとの連携が重要だと考えております。特に、研究者がフィールドと直接歩いて行き来ができることが重要でありまして、同一敷地内に整備できる萱浜地区の復興工業団地予定地への設置が妥当だと考えております。

(鈴木副知事)

他にありませんか。

なければ、国際産学官共同利用施設についても、「南相馬市原町区萱浜地区の復興工業団地予定地」に決定することに異議はありませんか。

それでは、国際産学官共同利用施設の設置場所については、「南相馬市原町区萱浜地区の復興工業団地予定地」に決定いたします。

最後に、知事から。

(知事)

ただ今、候補地を決定した両施設は、イノベーション・コースト構想の中核となる施設であり、また、世界に例のない施設であります。国内のみならず、世界から優れた研究者、技術者が集まり、そこに集まった人と地元の人が結びつき、地域にしっかりと根付いた拠点としていくことが何よりも大切です。

そして、世界に誇れる「メイドイン福島」のロボット技術や製品がこの地から生み出されていくことを期待しています。これから、国、そして地元自治体と連携しながら、一日も早い整備を目指してまいりましょう。

(鈴木副知事)

次に、報告事項の1つ目「ふくしま復興のあゆみ」について、企画調整部長。

(企画調整部長)

資料3を御覧ください。「ふくしま復興のあゆみ」が第15版となります。3月11日版を発行しておりますので、それ以降の復興の新たな動き、状況の変化等を踏まえ、データ更新やトピックの追加を行っております。

主な追加変更項目として、3ページをお願いします。3ページの右側でございますが、川内村に複合商業施設である「ショッピングセンターY-O-T-A-S-H-I」が3月15日にオープンをいたしました。また、檜葉町におきましては、3月30日

に檜葉遠隔技術開発センター研究棟が完成いたしました。完成式が行われたところ  
であります。原子炉格納容器の一部を模した実寸大の模型を備え、4月から本格運  
用を開始しております。

続きまして、4ページをお願いします。右上でございますが、応急仮設住宅の供  
与と新たな支援ということで、29年3月をもって、仮設住宅、借り上げ住宅の供  
与終了となる避難世帯に対しまして、その後の住まいについて、きめ細かな対応を  
行うため、その確認を行うための個別訪問を5月16日から県内外で行うこととな  
っております。

続きまして、6ページをお願いします。6ページの下段でございますが、環境回  
復のための拠点であります「福島県環境創造センター」につきまして、7月21日  
にグランドオープンの予定ですが、4月15日には猪苗代の水環境センターが開所  
しております。さらに、野生生物共生センターが4月27日にオープン予定とな  
っております。

続きまして、8ページをお願いします。「ふくしま国際医療科学センター」は、  
全面開所の28年秋に向けまして、準備を進めているところですが、4月18日に  
「先端臨床研究センター」が開所したところであります。

そのほか、巻末のデータ等について、更新をしておりますので、後ほど御覧いた  
だきたいと思っております。説明は以上です。

(鈴木副知事)

次に、報告事項の2つ目「ロボット産業革命の地ふくしま実現に向けた取組」に  
ついて、商工労働部長。

(商工労働部長)

資料4を御覧いただきたいと思っております。「ロボット産業革命の地ふくしま」の実  
現に向けた取組につきましては、まず、1枚目が27年度の取組の状況ございま  
す。研究開発から現場導入を踏まえて、様々な取組を行っております。ロボット  
産業の拡大に向けて着実に進展しているところでございます。

平成28年度においては、先ほど候補地の選定をしていただきました。ロボット  
テストフィールド及び国際産学官共同利用施設の両拠点について、国内外から数多  
くの企業等が集結する我が国随一のロボット開発拠点となるよう、新たに設置した  
ロボット産業推進室を中心に、着実に整備してまいります。

また、左下でございますけれども、「ロボットフェスタふくしま」の開催という  
ことで、昨年、第1回目を開催させていただきましたけれども、今年はよりグレー  
ドアップして第2回を開催していきたいと思っております。

それから、真ん中ございまして、研究・開発技術支援について、それぞれ、企  
業、大学に対する支援を行うとともに、また、このイノベーション・コースト構想  
の地域復興実用化開発等促進事業でございますが、県内の企業ばかりでなく、県外  
の企業ともタイアップをして、それぞれ、ロボット開発の支援に取り組んでまいり

たいと考えております。

右下の現場導入への支援でございますが、介護施設、それから、災害等ロボット導入事業について、それぞれ、保健福祉部と商工労働部で同時に支援をしてまいりたいと考えております。

右上でございますが、先進企業などとの販路開拓ということで、廃炉・除染ロボット技術研究会による展示会、商談会を通して、しっかり販路の開拓を図っていきたいと思います。

このような取組を通して、「ロボット産業革命の地ふくしま」の形成に向けて、全力で取り組んでまいります。

なお、本日は、会津大学、福島大学から、現在取り組まれているロボットの研究開発の状況等について、プレゼンいただきたいと思います。まず、会津大学からお願いいたします。

(会津大学)

会津大学の復興支援センター、センター長をしております。岩瀬と申します。よろしくお願いたします。お手元の資料4-1を基にここに写しながら御説明いたします。

本学、県内の企業と共同で、ロボット技術開発支援事業ということで昨年度来、続けております。主に2つの項目がございまして、まずは、ロボット自体の開発、もう一つは、ロボットソフトウェアのソフトウェア整備という、この2つでございます。

ロボット開発自体に関しましては、ここがございますように、大型ロボットからドローン、または、研修用のロボット、こういう多岐にわたるものを開発しています。この中で、現在、ロボットというのは、開発コストの半分近くをソフトウェアが占めるという時代になってきておりますので、本学が持つICTの先端技術、画像とかですね、自律制御とかですね、そういうところの技術を県内企業と共同で、新たな付加価値を提供しながら左のようなロボットを作ると、こういうような構図でございます。

右のロボットソフトウェアの整備ということは、今、ロボットのソフトウェアを作っているという場合、非常に、やはり、個人個人の技術者独自の方法で作られているということで、中々、再利用ができていないという課題がございます。ということで、私どもはソフトウェア開発の標準化というのを導入しまして、たまたま、産総研が一番良いロボットソフトウェアの標準化資本を持っておりますので、これを提供するというので、また、御協力いただいて、会津大学の中に福島県のICT拠点として、センターICTラボを昨年度12月にオープンいたしましたので、その中にロボットの部品を溜め込んでいこうと、ソフトウェアの部品を溜め込んでいこうと、それをソフトウェアライブラリと称して推進をしております。そして、下でございますように、部品としては駆動系から始まって、こういう分類をしながら溜め込んでいく。そして、昨年度1年で既に50個ぐらいの部品を溜め込ん



でいます。これによって、今後、県内企業の方が開発する時に一から開発しなくて済むということで、コスト面、あと期間面で非常に効率的になるというところを狙っております。よって、私ども、会津ソフトウェアでは非常に強いところですので、ITの会津と、イノベーション・コースト浜通りの連携をしていくということで、こういうモデルを目指していこうということでやっております。

次に、動くイメージで動画を用意しましたけれども、左下に大型の災害ロボット「援竜」と呼ばれる人間よりも大きい、そういうアームを持ったようなこういうロボットのソフトウェアの標準化をしている。そして、クローラー型、色々なところを登っていくものですが、これを、ユーザーインターフェース含めて、標準化したソフトの中で動いている。これは「アイザック」という会津のロボットメーカーでやっております。

また、ユニークなのは、下の「ゴローン」という、ゴロゴロ地面を這うような形で、そこで、色々な画像とか、色々なデータとかを収集して、iPadとかに映すのをやっております。

また、今、ドローンが盛んに言われておりますけれど、右上、本学は、有線のドローンというのを研究しております。意外にですね、ドローンは15分とか20分しかバッテリーが持たないという制約がございますので、これなら給電で何時間でも飛ぶことができるので、上空から継続的に画像を送るということで、中々これも産業転用が優良だと見られています。ケーブルが付くことによって、非常に引っ張りとか、重さが、コントロールが難しいので、それを数理モデルでやろうとして、本学の学長の岡自ら、喜々として、開発をやっております。こういうような形で、地上系、あと、空、または、地面ですね。こういうところのデータを集めて相互にロボットが連携するというところでインターネット・オブ・ロボットと呼んでますが、こういう新しいモデルを今、開発しております。

昨年度開始しましたけれども、既に県内企業7社、技術者で約50人、研究者で10人規模ということで、本学としては、非常に大きな規模の研究プロジェクトが開始されました。非常に良いスタートが切れたと思っておりますけれども、商工労働部始め、皆様方との協業もしくは御支援のほど、引続きよろしく願いいたします。

(商工労働部長)

それでは、福島大学さん、よろしく願いいたします。

(福島大学)

福島大学の高橋と申します。本日はこういうチャンスをいただきありがとうございます。

本学のロボットバレー構想、「ロボット革命の地ふくしま」ということで、それに向けた取組の一端を御紹介させていただこうと思います。時間が5分で一部しか御紹介できませんが、よろしく願いいたします。

先頭のこのページなんですけど、代表的なロボットの写真を持ってまいりました。左側にありますこれが、パートナーロボットということで、日常生活を全般的に支援していこうという、そういうロボットでございます。

右上の方が、環境調査・災害対応ロボットということで、このロボットは、湖沼での放射能、あるいは、環境調査をするロボットで、この開発には、昨年度、県の災害対応ロボット関係予算をいただきまして、開発させていただきました。ありがとうございました。

右下にあります、ちょっと形状が違いますが、人間の筋肉は電気で動きます。その、電気で動くという機能を使って、例えば脊髄損傷が起こった場合に、外から神経に電気刺激を与えてあげると、麻痺した筋肉が動きます。こうすることによって、使っている技術はロボット技術そのものなのですが、いわゆる電気モーターではなくて、人間の筋肉を直接動かすことによって、足が麻痺していても、車いすが漕げるですとか、こういった技術開発をしております。こういったシステムと要素技術ということで両面から取り組んで、例えば、1つの成果としては、昨年度ですけれども、福島大学で初めてのベンチャーを立ち上げるというような形で、結実をする成果が出ております。

福島大学として、福島をロボットのいわゆるメッカにすると、その構造は、やはり、こういうサイクルを作ることではないかなというふうに考えております。ここに、イノベーションサイクルの形成と書いてございますが、要するに大学の使い方というような話にもなるのかもしれませんが、大学には、色々な技術がございます。こういったものを地域の企業さんと一緒に開発をして、もちろん、大学の保有する設備もかなり特殊なものが結構ございますので、こういったものを使いながら、グルグル回していくと、そして、もちろんこの関わり方としては、地域内外の大学、それから、地域の中核企業、もちろん地域外の企業さんも当然入っていただきたいわけですが、この中をグルグル回ると、そして、例えば、イノベーションサイクルというのは、大学が保有する要素技術を企業の技術に移転していくと、参画企業はその技術を習得しつつ、それを高度化し、事業化して、近未来の人支援ロボットのトリガーとなる。そして、この要素技術は当然その時点で、収益を確保できるような事業にしていくとかですね、大学の方は、その高度化した要素技術を使うと次のステージのロボットが作れますので、それを使って、また新たなシーズを生んでいくと、このグルグル回るといえるのは、地域をロボットのメッカにしていくために非常に重要ではないか。特に福島県は残念ながら中小の企業が多くて、ただ、技術力は非常にあります。そして、さらに、一段上りたいという意欲を持った社長さんもいっぱいおりますので、それをなんとか活用してですね、福島県をまさに「ロボット革命の地」にするというのは、こういうサイクルを作ることではないか、これが、最終的に技術のグローバル展開に繋がっている。こういうような発想の基で、地域との連携を強力に進めているということでございます。それで、このサイクルを回すために、こういう、例えば、人支援ロボットであったり、あるいは、こういう災害対応ロボットであったり、というようなことであります。それで、今回ロボット

テストフィールドができますので、こちらについては非常に強力なフィールドができあがるということで、大変、私も喜んでるところでございます。

次に御紹介するのは、敢えて、災害対応ロボットではない方を持ってまいりました。どうしてこっちを持ってきたのかと言いますと、災害対応ロボットは当然、必要なことですし、今後も力を入れていく必要があるのですが、産業として大きくなる可能性を持っているのは、実は、こちら側なんです。それで、ロボット革命の地として、長きにわたってこの地を発展させていくためには、最終的にはやはりこういうロボットで産業をしっかりと立てていくということが必要なのではないかと、いうふうに考えています。

今、我々が取り組んでいるのは、この黄色になりますけれど、力仕事のできる人支援ロボットです。例えば、ペッパーですとか、いろんなロボットがございしますが、基本的には力仕事はいたしません。情報提供をするということになってはいますが、これが、一般家庭の例えば主婦が買いたいと思うロボットにするためには、例えば、廃品回収で新聞を持って行ってくれるですとか、掃除をしてくれるとか、そういった意味で力仕事ができる必要があります。そういったロボットを作るには一体どうしたら良いだろうか、そのための要素技術って一体どういうものがあるのだろうか。それを、大学がアイデアを出し、基本的なところを確認し、それを、企業と一緒に製品化していくと、そういうサイクルを作りたいというふうに考えているところです。それで、例えばですが、ロボットを一台作るということになれば、例えば、どうやって移動しますか、それから、このロボットをどうやってコントロールするんでしょうか。コンピューターボードも当然作らなくてはなりません。例えば、触った状況がわかる、このロボットが非常に複雑な形をしておりますので、この人間の皮膚のようにこういう複雑な形の表面を全面的に覆える触覚センサーは現在まだございません。こういったものをやはり、一個一個開発していく必要があります。もちろん、視覚センサー、それからこの腕、ハンド、これらは代表例ですけども、これらの様々な技術がございします。そういう意味で、ロボットの産業というのは、自動車産業に匹敵する、もしくは、それ以上の広がりを持った産業に成長する可能性があるわけなんです。そのためにこそ、やはり、先程申し上げたようなイノベーションサイクルを是非繋げていきたいです。それで、一つの例ですけども、右下にありますのは、先程申し上げたロボットの全身を覆うセンサーというのを地元にありますムネカタという企業さんと一緒に開発をしております。これは、ムネカタさんが、スプレーコーティングという、圧電素子をちょうどペンキを塗るように塗れる技術を、特許技術をお持ちなのですが、これをベースにして、我々の方でアイデアを出しまして、これを非常に薄い、一層当たり50ミクロン位なんですけれども、こういうセンサーを造りまして、そして、ノイズにも非常に強い、放射線に対しても非常に強いセンサーというのを今開発している最中です。もう、原理的には大体分かってまして、これを今、次のステップに進めようという状況でございます。ということで、このような取組を福島大学はしています。

一つ情報提供なのですが、実は来年、5月上旬、ちょうど1年位になりますけれ

ど、日本機械学会のロボティクスメカトロニクス講演会というのが開かれます。実行委員長は私でございます。これは、日本におけるロボット系の最大の会議の一つです。ロボット系の会議は大きく二つあるんですけども、日本機械学会が主催しているこのロボティクスメカトロニクス講演会、あと、もう一つは日本ロボット学会主催している学術講演会があります。それで、このポスター発表が主になるんですけども、ポスター発表1500件ということで、非常に大きな大会ですので、県内ですとビッグパレットふくしまになりましたけれども、ここで、来年のちょうど今頃、5月の天候の良い時に福島の宣伝も兼ねてやりたいと是非思っておりますので、この件についても、色々県の皆様にも御協力お願いしたいと思っております。

(鈴木副知事)

会津大学の岩瀬先生、福島大学の高橋先生、どうもありがとうございました。最後に知事からお願いします。

(知事)

岩瀬先生、高橋先生素晴らしいプレゼンをありがとうございました。今、お二人から熱のこもった、未来に向かってのプレゼンをいただきましたが、会津大学、福島大学を始め、県内企業においても新しいロボット技術開発へのチャレンジが進んでいます。

また、担い手の労働環境を革新的に改善するアシストスーツやマッスルスーツについても、医療や介護の現場だけではなく、物流業、建設業、さらには金融業など、様々な分野への導入が広がり始めています。

先ほど候補地を決定したロボットテストフィールド等の拠点整備を着実に進めていくとともに、引き続き、研究開発や現場導入支援、さらには、人材育成やネットワークの形成など一体的な、相互的な支援を進め、我が国のロボット産業をけん引するような「ロボット産業革命の地ふくしま」の実現に向けて、全庁挙げて、しっかりと取り組んでまいりましょう。

(鈴木副知事)

以上で、推進本部会議を閉じます。